

原油レポート

< リビアの油田開発について >

1. 原油市況～石油製品高による需要鈍化を受け、原油相場は軟化地合い

原油価格（WTI期近物）は8月末に一時1バレル70.85ドルをつけた後、下落傾向で推移し、10月10日の終値は1バレル61.80ドルと3日連続で61ドル台であった。

ハリケーン被災からの復旧ペースは緩やかであり、当面、原油や天然ガスなどエネルギー関連相場は、ハリケーンからの復旧状況を睨みながらの推移になるであろう。原油に関しては、生産が停止する一方で精製も停止していることや先進国の備蓄放出、OPECの生産増加などを考慮すれば、必ずしも需給が逼迫しているわけではない。一方、製油所の被害が大きいため、ガソリンや灯油など石油製品の供給力が不足しており、原油に比べ、ガソリンが高止まりするようになっている。足元では、製品価格上昇による需要抑制が、原油相場の下押し要因として注目されてきており、目先は、相場は軟調が続くと思われる。

2. トピック～リビアの油田開発について

リビアは石油資源の外資への開放を進めており、2003年の国連による経済制裁解除と前後して、従来からリビアと結びつきの強い欧州企業が活動を活発化させてきた。これにより、2004年にかけて原油生産能力は13万バレル程度しており、今後も2007年にかけて10～20万バレル程度の増加が見込まれている。

さらに、2005年1月には、米国企業も参加して、鉦区の公開入札（第1次）が行われた。この鉦区には、既存の油田・ガス田は含まれておらず、探鉦リスクが存在しているものの、近隣に大油田が存在することなどからポテンシャルの高さを評価して、非常に好調な入札結果であった。また、10月2日には、より大規模な第2次入札が行われ、日本企業も落札している。

リビア政府は、現在は日量165万バレルの生産量を2010年の終わりまでに300万バレルにまで引き上げるため、今後300億ドルの投資を呼び込む計画であるという。リビアについては、何よりも着実に国際社会に復帰をしてきているという意義が大きい。足元のリビアの油田入札の結果が生産力になるのは2010年以降になるとみられ、当面の需給バランスには影響はない。



【お問合せ先】調査部（東京）芥田

E-mail: tomomichi.akuta@ufji.co.jp

次回公表日：2005年10月24日（月）頃

本レポートは情報提供を唯一の目的としており、何らかの金融商品の取引勧誘を目的としたものではありません。

また、掲載された意見・予測等は資料作成時点での判断であり、今後予告なしに変更されることがあります。

「原油レポート」のメール配信サービスを提供しています。ご希望される方は、「原油レポート配信希望」と記して上記E-mailアドレスに送信して下さい。また、配信停止をご希望される方は、「原油レポート配信停止」と記して上記E-mailアドレスに送信して下さい。

1. 原油市況；石油製品高による需要鈍化を受け、原油相場は軟化地合い

原油価格（WTI期近物）は、8月末に一時1バレル70.85ドルをつけた後、下落傾向で推移し、10月10日の終値は1バレル61.80ドルと3日連続で61ドル台であった。

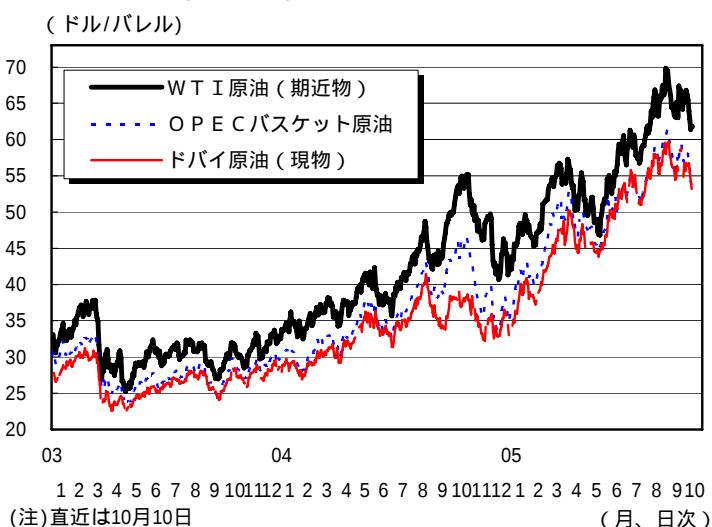
ハリケーン被災からの復旧ペースは緩やかであり、当面、原油や天然ガスなどエネルギー関連相場は、ハリケーンからの復旧を睨みながらの推移になるであろう。原油に関しては、生産が停止する一方で精製も停止していることや先進国の備蓄放出、OPECの生産増加などを考慮すれば、必ずしも需給が逼迫しているわけではない。

また、製油所の被害が大きいため、ガソリンや灯油など石油製品の供給力が不足しており、原油に比べ、ガソリンが高止まりするようになっている。とくに冬場に需要期を迎える暖房油は、暖房シーズン前にもかかわらず「ガソリン価格＝暖房油価格」とプレミアムが付く状態が続いている。こうした中、足元では、製品価格上昇による需要抑制が、原油相場の下押し要因として注目される。

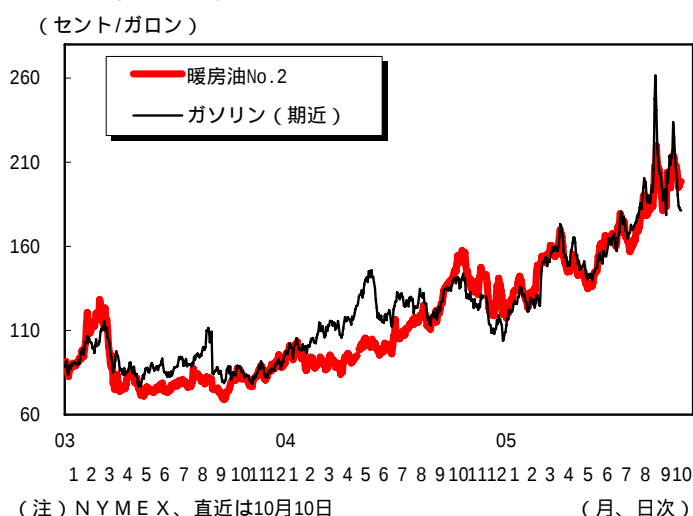
原油先物の投機筋のネットポジション（long-short）は、7月以降は大きなポジションの偏りはなく、売りと買いがほぼ均衡した状態が続いていたが、9月13日以降は売り超幅が拡大している（図表7）。一方、ガソリンについては、投機筋のネットポジションは、引き続き買い超であるが、買い超幅は縮小が続いている（図表8）。

直近（10月10日時点）の先物カーブを見ると、価格のピークは2006年6月物で63.06ドルとなっている。北半球の冬場の需要期にかけて原油の先高感があり、その後も高止まりするとの思惑を反映している（図表5、6）。ハリケーンなど一時的材料により押し上げられた分が剥落することや、足元の需要鈍化を考慮すると、当面は市況の軟化が続く可能性があるが、引き続き世界景気や原油・石油製品の供給動向次第では上値を試し易い状況である。

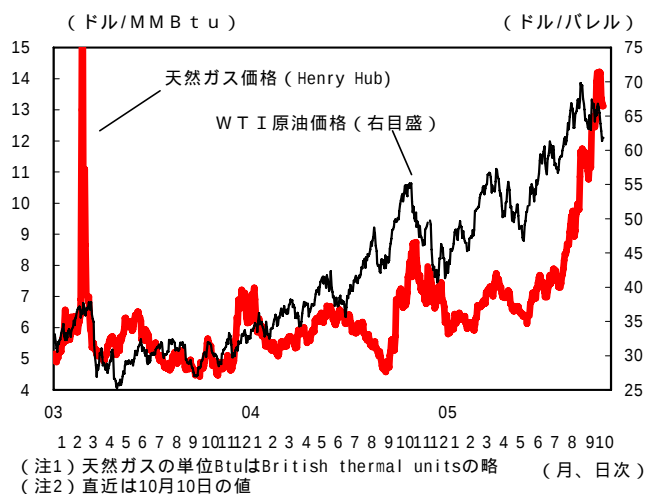
（図表1）原油市況の推移



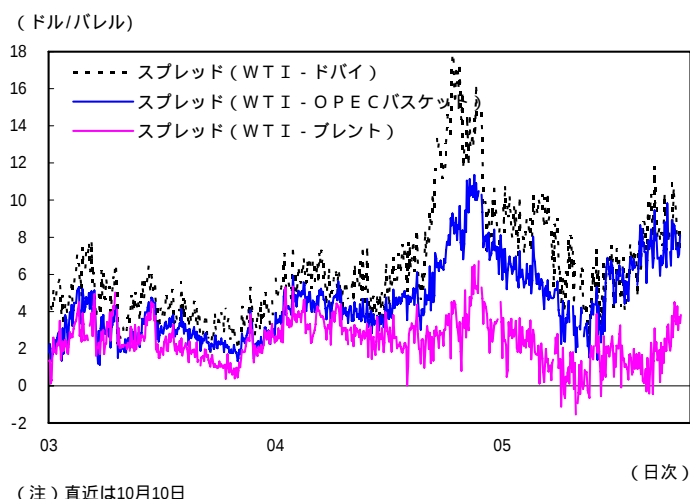
（図表2）石油製品市況の推移



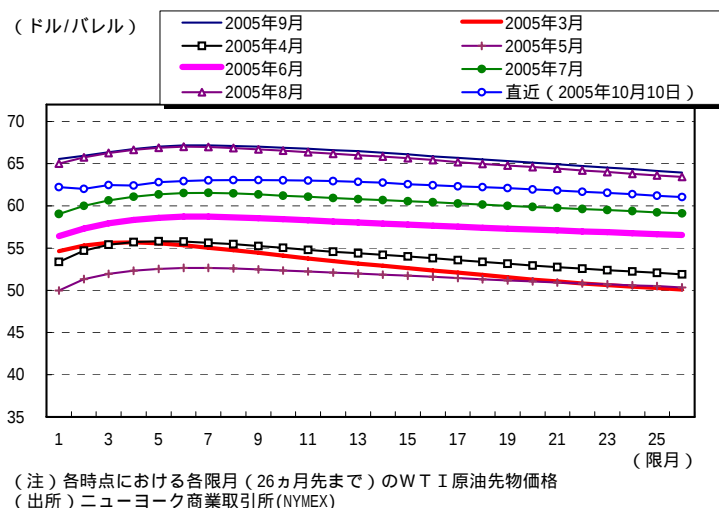
(図表3) 米国天然ガス市況の推移



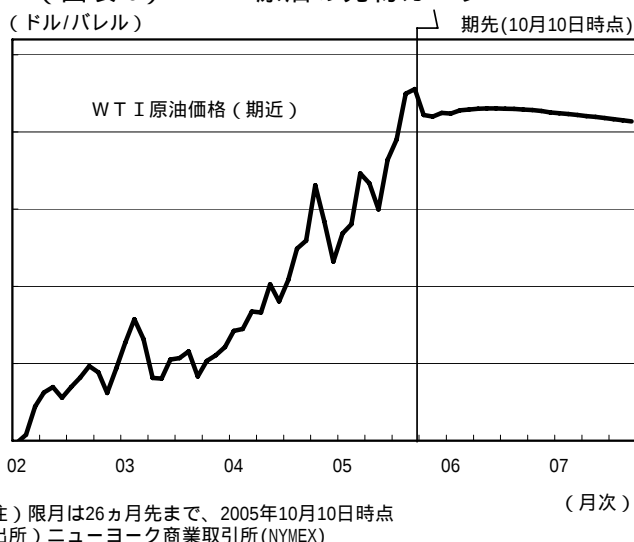
(図表4) 油種間スプレッドの推移



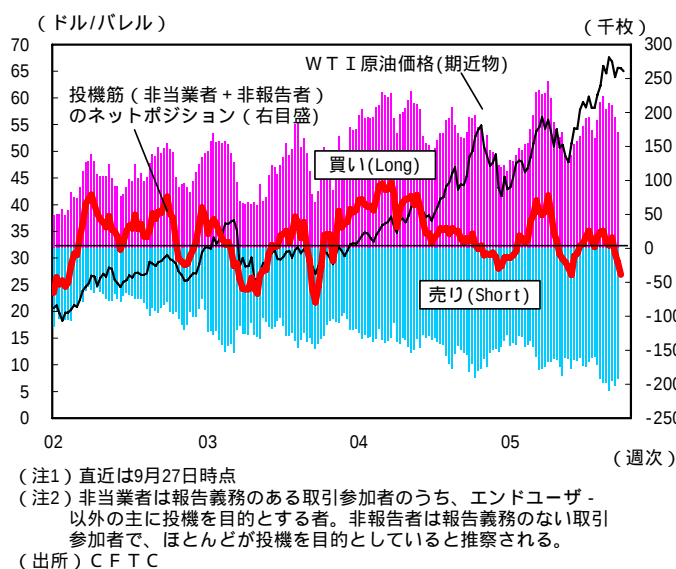
(図表5) WTI原油先物価格の限月推移



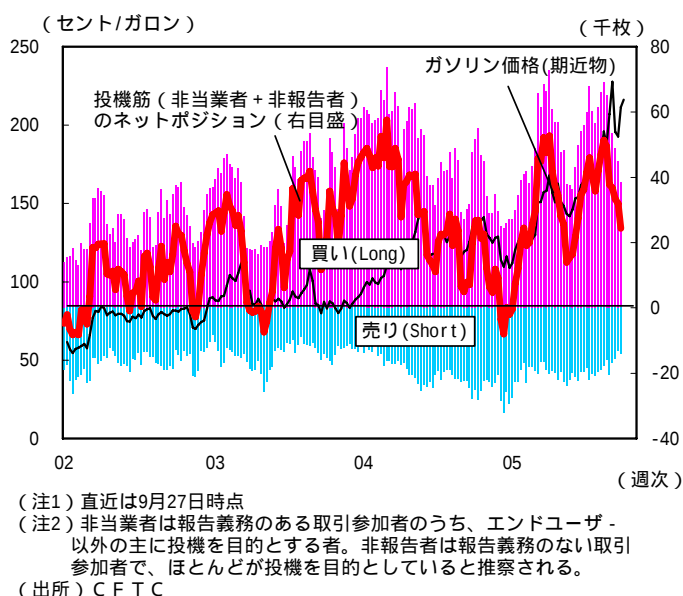
(図表6) WTI原油の先物カーブ



(図表7) 投機筋のポジション (原油)



(図表8) 投機筋のポジション (ガソリン)

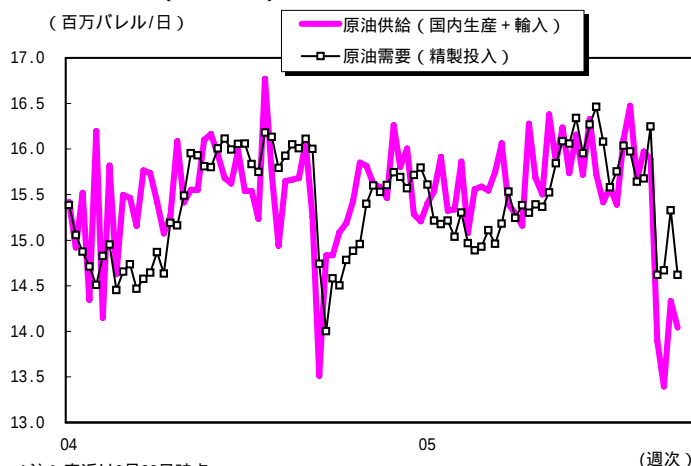


2. 米国の需給動向

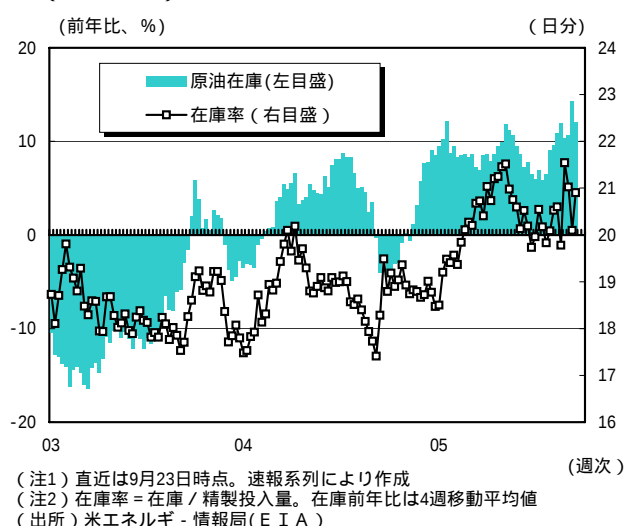
(1) 原油；在庫は高水準

ハリケーン「カトリーナ」の影響で落ち込んでいた原油生産と精製がやや持ち直しつつあったが、9月23日に終わる週は、ハリケーン「リタ」により再び落ち込んだ(図表9)。生産とともに精製も落ち込んでおり、在庫は引き続き前年水準を上回って推移している(図表10)。

(図表9) 原油供給と原油需要



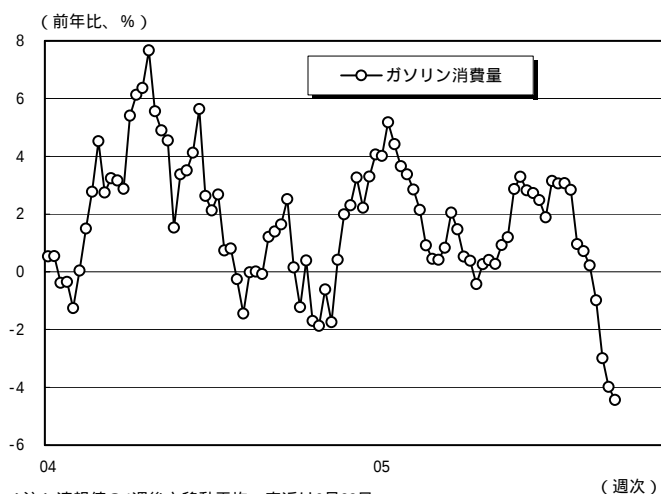
(図表10) 民間原油在庫と在庫率



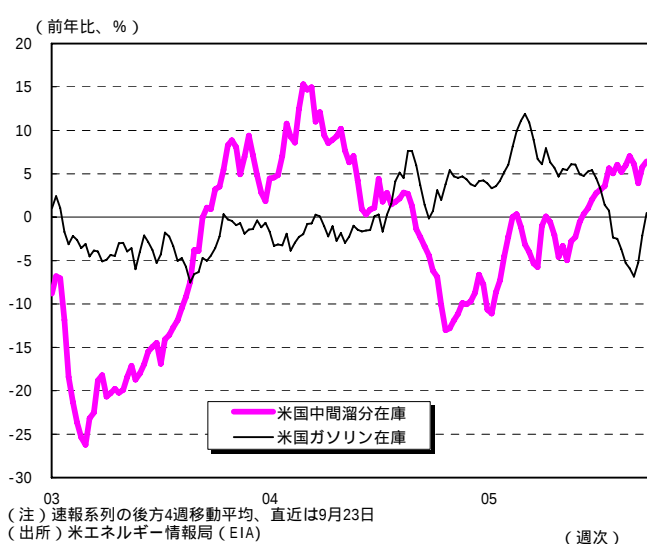
(2) 石油製品；ガソリン在庫の減少が一服

レギュラーガソリンの小売価格は、19日に終わる週には1ガロン (= 3.785 リットル) あたり 2.78 ドルまで低下していたが、10月3日に終わる週には 2.97 ドルと再び3ドルに迫っている。ガソリン価格が高値圏にあることなどから、ガソリン消費は減速している(図表11)。一方で供給が持ち直していることからガソリン在庫の減少は一服しつつある(図表12)。暖房油など中間溜分の在庫は前年水準を上回って推移している(図表12)。

(図表11) ガソリン消費(精製)



(図表12) ガソリンと中間溜分の在庫



3. OPECの生産動向（9月実績）；生産枠は据え置きだが、実質増産

OPEC 10 カ国（除くイラク）の9月の生産量は2845万 b/d と前月より8.5万 b/d 減少した（図表13）。OPECは6月15日の総会において、7月から生産枠を50万 b/d 引き上げ2800万 b/d とすることで合意し、原油価格が下落しない場合はさらに50万 b/d の追加増産をすることを示唆していた。9月の生産は小幅減少したものの、実質的には、生産枠を上回る増産を続けているといえる。

9月19～20日に開催されたOPEC総会では、生産枠の拡大は見送られたものの、約200万バレルある余剰生産力内の増産要請に対しては、10月1日より3ヵ月間はいつでも対応するとの決定をした。原油は十分に供給されており、原油高は産油国の供給不足によるものではない、という従来からのOPECの見方に従った決定内容といえる一方で、運用によっては増産期待に答えられるものでもあるため、この決定の原油相場への影響は中立的であったとみられる。

また、OPECの産油能力が伸びておらず供給余力が乏しくなっていることへの懸念に対しては、現在約3250万バレル（OPEC 10 カ国＋イラク）ある生産能力を2010年までに少なくとも3800万バレルに拡大すると述べている。

しかし、生産能力の拡大はまだ先の話であり、目先の生産余力は乏しいとの見方が根強い。また、先進国の製油能力不足がボトルネックであり、製品高が原油高につながっているという要因もある。先進国の備蓄放出により、目先は、供給懸念により原油高が加速するリスクは低下しているが、中長期的な需給逼迫懸念は残っている。その解消には川上における油田開発と川下における精製能力増強によって供給力が拡大することが必要である。

（図表13）OPECの生産動向

国名	生産量(9月)	生産量(8月)	超過量(9月)	生産枠(7月～)	産油能力	稼働率	(万バレル/日)
							生産余力(9月)
サウジアラビア	958.0	958.0	48.1	909.9	1,080.0	88.7%	122.0
イラン	398.0	408.0	-13.0	411.0	410.0	97.1%	12.0
クウェート	250.0	245.0	25.3	224.7	255.0	98.0%	5.0
U A E	250.0	250.0	5.6	244.4	255.0	98.0%	5.0
カタール	79.0	79.0	6.4	72.6	80.0	98.8%	1.0
ベネズエラ(注4)	270.0	270.0	-52.3	322.3	275.0	98.2%	5.0
ナイジェリア	242.5	245.0	11.9	230.6	250.0	97.0%	7.5
インドネシア	94.0	94.0	-51.1	145.1	100.0	94.0%	6.0
リビア	168.0	169.0	18.0	150.0	170.0	98.8%	2.0
アルジェリア	136.0	136.0	46.6	89.4	140.0	97.1%	4.0
OPEC 10カ国	2,845.5	2,854.0	45.5	2,800.0	3,015.0	94.4%	169.5
イラク	205.5	187.0	-	-	250.0	82.2%	44.5

（注1）超過量（9月）＝生産量（9月）－生産枠（7月～）

（注2）産油能力は、30日以内に生産可能で、かつ90日以上持続可能であることが条件。

（注3）サウジアラビアとクウェートの生産量には中立地帯の生産量が1/2ずつ含まれる。

（注4）ベネズエラの実生産量は生産枠には入らない重質油（約59.0万バレル/日）が含まれる。

（注5）稼働率（％）＝生産量（9月）／産油能力＊100

（注6）生産余力＝産油能力－生産量（9月）

（資料）Bloomberg

4. トピック；リビアの油田開発について

リビアの石油生産は 1970 年前後に日量 300 万バレルを記録したが、その後、国際社会での孤立を強めたことを背景に 80 年代の生産量は 100 万バレル程度まで減少し、その後やや回復しているが、2004 年も 140 万バレル台で低迷していた。1988 年にパンナム機爆破事件の容疑者引渡しを拒否したことにより、92 年から国連の経済制裁が続いていた。

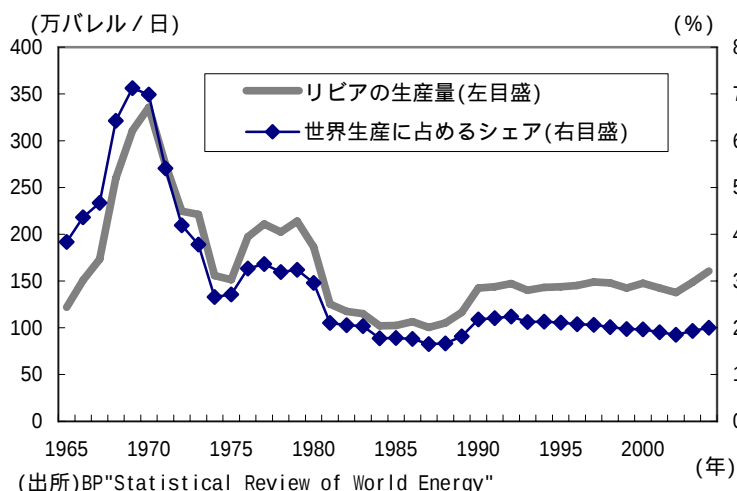
しかし、2002 年にはアルカイダ関係者を拘束するなど米国の対テロ戦争に協力する姿勢を示し、2003 年 8 月にはパンナム機爆破事件での責任を認め賠償金の支払を表明し、同年 12 月には大量破壊兵器の開発破棄と査察受け入れに合意するなど、近年は国際社会での孤立状態からの脱却を目指している。こうした動きを受け、2003 年 9 月には国連による経済制裁が解除され、2004 年 9 月には米国による単独制裁も解除された。

リビアは石油資源の外資への開放を進めており、2003 年の国連による経済制裁解除と前後して、従来からリビアと結びつきの強い欧州企業が活動を活発化させてきた。これにより、2004 年にかけて原油生産能力は 13 万バレル程度増加しており、今後も 2007 年にかけて 10～20 万バレル程度の増加が見込まれている。

さらに、2005 年 1 月には、米国企業も参加して、鉱区の公開入札（第 1 次）が行われた。この鉱区には、既存の油田・ガス田は含まれておらず、探鉱リスクが存在しているものの、近隣に大油田が存在することなどからポテンシャルの高さを評価して、非常に好調な入札結果であった。落札企業は、当面、探鉱に 3 億ドルを投じ、油田が発見されれば、生産の 10.8～38.9%（＝入札の結果）が企業の取り分になる。また、10 月 2 日には、より大規模な第 2 次入札が行われ、日本企業も落札している。落札企業は、当面、5 億ドル弱の探鉱費を投じる見込みである。

リビア政府は、現在は日量 165 万バレルの生産量を 2010 年の終わりまでに 300 万バレルにまで引き上げるため、今後 300 億ドルの投資を呼び込む計画であるという。

（図表 14）リビアの原油生産の推移



他の産油国の動向を見ると、2006 年にかけてロシア、ブラジル、アンゴラ、カナダなどを中心に非 O P E C 諸国で日量 100 万バレル規模の増産が見込まれている。また、O P E C でも、リビアのほか、サウジアラビアの能力増強に加えてイラクの生産の回復も見込まれ、100 万バレル程度の能力増強になる可能性がある。一方で、2006 年の原油需要の増加は世界景気の動向に影響される面も大きい、100 万バレルに達することはないとの見方が一般的であり、原油需給は緩和が見込まれる。

長期的には、O P E C は現在約 3250 万バレル（イラクを含む 11 カ国）ある生産能力を 2010 年までに少なくとも 3800 万バレルへと 750 万バレル程度拡大するとしている。リビア以外の国々をみると、サウジアラビアが、2009 年まで 150 万バレル増強し市場の要請があれば 400 万バレル拡大するとしている。加えて、イラクが 2010 年までに 200～300 万バレル、ナイジェリアが 150 万バレル程度の能力増強を目指すとしている。

もっとも、イラク、ベネズエラ、ナイジェリアなど政治情勢に不安がある国が多い状況は変わらず、実際に油田が開発できるかどうかは不確定要素が多い。リビアについては、何よりも着実に国際社会に復帰をしてきているという意義が大きい、足元のリビアの油田入札の結果が生産力になるのは 2010 年以降になってくるとみられ、当面の需給バランスには影響はない。

（図表 15）産油国の生産量と原油埋蔵量

	埋蔵量 (順位) 10億バレル	(%)	生産量(日量) (順位) 百万バレル	(%)	可採年数
世界	1188.6	(100.0)	80.3	(100.0)	40.6
OPEC	890.3	(74.9)	32.9	(41.0)	74.1
非OPEC	177.4	(14.9)	35.9	(44.7)	13.5
旧ソ連	120.8	(10.2)	11.4	(14.2)	29.0
サウジアラビア	< 1 >	262.7 (22.1)	< 1 >	10.6 (13.2)	68.0
イラン	< 2 >	132.5 (11.1)	< 4 >	4.1 (5.1)	88.9
イラク	< 3 >	115.0 (9.7)	< 14 >	2.0 (2.5)	155.5
クウェート	< 4 >	99.0 (8.3)	< 12 >	2.4 (3.0)	111.9
アラブ首長国連邦	< 5 >	97.8 (8.2)	< 10 >	2.7 (3.3)	100.5
ベネズエラ	< 6 >	77.2 (6.5)	< 9 >	3.0 (3.7)	71.0
ロシア	< 7 >	72.3 (6.1)	< 2 >	9.3 (11.6)	21.3
カザフスタン	< 8 >	39.6 (3.3)	< 18 >	1.3 (1.6)	83.8
リビア	< 9 >	39.1 (3.3)	< 16 >	1.6 (2.0)	66.7
ナイジェリア	< 10 >	35.3 (3.0)	< 11 >	2.5 (3.1)	38.5
米国	< 11 >	29.4 (2.5)	< 3 >	7.2 (9.0)	11.1
中国	< 12 >	17.1 (1.4)	< 6 >	3.5 (4.3)	13.4
カナダ	< 13 >	16.8 (1.4)	< 8 >	3.1 (3.8)	14.9
カタール	< 14 >	15.2 (1.3)	< 21 >	1.0 (1.2)	42.1
メキシコ	< 15 >	14.8 (1.2)	< 5 >	3.8 (4.8)	10.6
アルジェリア	< 16 >	11.8 (1.0)	< 15 >	1.9 (2.4)	16.7
ブラジル	< 17 >	11.2 (0.9)	< 17 >	1.5 (1.9)	20.0
ノルウェー	< 18 >	9.7 (0.8)	< 7 >	3.2 (4.0)	8.3

(注)可採年数は、埋蔵量÷生産量

(出所)BP"Statistical Review of World Energy"